

同志社を

ふりかえって

— 定年退職者による感想文 —

冷たい同志社から

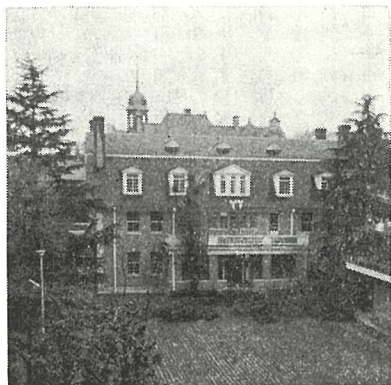
暖かい同志社へ

吉 川 貫 二

本年三月をもって、わたくしは古稀を迎え、定年退職することとなったが、この時点において、多くの人達から、おめでとうとか、永年ご苦労さまでしたといった祝辞を受けた。長生きしたお蔭でこの歳月まで在職したことからみて、これらの祝辞はそのまま言葉通りに受取ってよいのではなからうか。そこには、財界などで見られる、五十五才という今日ではなお働きざかりの年齢に

おける定年制の場合とは、同じく定年といっても、いろいろな点でかなりニュアンスの相違が見受けられるし、またよくぞこの年まで生き抜いて、とにもかくにも、三十五年間勤め上げることができたということこそ多少の感慨を覚えるものの、定年退職それ自体には格別の感傷はない。もっとも、人生の丁度半分を同志社において終始したことでもあり、とうとう同志社を去る時が来たという現実から一まつの寂しさを感じないわけでもないが。

ところで、由来同志社は去ったものには冷たいという定評がある。具体的にどういふ点で冷たいのかよく判らないし、それはまた、人さまざまの形で感じとられるところであるうが、主として物質的な面に関連する場合が多いのではなからうか。しかし、わたくしとしては、この点については、いまのところとかくの不



満はない。わたくしがここで触れておきたいことは、むしろ精神面についてである。退職後も相変らず暖かい心で遇してほしいと、とりわけ切望しておきたいことは、定年退職者（任意退職者の場合はともかくとしても）に対しては、せめては図書の利用について格別の便宜を与えてほしいということである。学者にとっては、在職退職を問わず、図書は生涯の研究の拠りどころであるし、またこの種の便宜を与えたところで、学校側には別段の迷惑も金もかかるわけではない。ところが、一方退職者にとって、なにもまさる心暖まる措置となるであろう。こうしたことは、冷たい同志社を暖かい同志社に導く一つの有力な具体例ともいえるのではなからうか。

わたくしは在職中から自分の学問の後継者については特に意を用いてきた。これこそは去りいく者が学校に対する最大の責務であると考えていたからである。幸いにして、わたくしは優秀な三人の後継者に恵まれ、心置きなく同志社を去ることができる。この点に関する限り、思い残すことのないまことに爽やかな心境にある。

（前大学商学部教授）

同志社のわが半生

―老のくりごと―

小 野 則 秋

私が同志社に就任したのは今から三十六年前の昭和十年の四月

であった。その年同志社は丁度創立六十周年を迎え十一月には盛大な創立記念行事が繰りひろげられ、第十代総長に新進気鋭の若い湯浅八郎先生が就任して諸事活気に満ちていた。とりわけ私に深い感銘を与えたのは今まで九州で生活して世界的文化に触れる機会がなかった若い私には、かねてから新聞、雑誌、著作などで名前だけは知っていた内外の学界の名士から直接に話を聞く機会を恵まれたことであった。三十六年の追憶の中に残っている名士は同志社校友としては浮田和民、徳富蘇峰、深井英五、松波仁一郎其の他の諸氏を始めとして、外国からは有名な盲目の聖者で盲啞教育事業に尽していたヘレン・ケラー女史、「児童の世紀」の著作で有名なエレン・ケイ女史其他国際的名士が次々同志社に來訪していつも一場の講演会が持たれ、流石に国際的学園としてふさわしい同志社の日常を誇りともし、喜びともした日々であった。

私が同志社に入った動機は、八幡市立図書館の主席司書をしていた当時、図書館の予算問題で市長と一戦まじえて飛び出したのが機縁でその頃の日産炭鉱にいた同志社理事島本徳三郎氏に拾われて同志社図書館に就任したので始めて、その時島本氏は私に「君は頗る血の氣の多い青年のようなだが、同志社では人間を相手にせず神様相手の生活が大切だ」といわれた。「神様相手」この言葉は以来私の信条となつてあらゆる機会に私の強い支えとなつて来た。その頃の私は勿論キリスト教の「神」についての知識にも理解にも乏しかったが、少年時代から田舎漢学者の父のもつて受けた「大学」や「論語」などの素読で知っていた「天」と同じものと信じて、わが信念をもってわが道を歩む私の神様相手の生

活が始まった。其後同志社の生活の中で先輩や礼拝、説教などを通してキリスト教の神は「愛」である事がおぼろげながら理解されて来たが、三十六年前の同志社はまことに神の愛に満ちた家族的な学園で思ひ出の中に心のあたたまるものが残る。以来太平洋戦争によってゆがめられ、また戦後二十五年間に急激に拡張されて来た同志社は現在人間のみが多くなり次第に神様を絞め出しているのではないかと、私は時に暗い気持ちになることもあるが、それは半生を同志社に過ごした者の同志社に対する偏愛からの杞憂であろうか。

(前社史料編集所主任)

定年退職に

あ た っ て

篠 田 一 人

私の同志社在職は、昭和十七年から四十五年までで、その間に一年余りの空白（戦時中他に転職）がありますが、前後でほぼ二十六、七年間は同志社学園の一員でした。

この間、この学園のもつアトモスフィアにじゅうぶんになじむことができました。魚が水を得たという形容にはほど遠いにしても、また、いろいろ小さな不満はあったにしても、ともかくもこの学園こそ私がいちばん適合することのできるところだという気持をもちつけていました。そういう意味で、私はしあわせな人生の後半をすごしたものだ、と、ありがたく、感謝の心でいっぱ

いです。同志社につとめることができてよかった、というのがいつわらない感想です。

同志社ではキリスト教はムードとしてキャンパス全体を包んでいたような気がします。それは甘い香りのそよ風のように学園にただよったり、あるときはよどんだ空気のようには沈黙していたりしたようです。だがその反面、なまぬるい湯につかりこんで出るにも出られない、さりとてからだがじゅうぶんにあたたまりもしない、というようなもどかしさが避けられませんでした。同志社を燃え立たせるもの、そういう強く烈しい焰は、この二十五年間いっぺんも燃えあがりはしませんでした。同志社を燃え立たせるもの、それは、創立者新島襄先生らしいの伝統的精神であるキリスト教的信仰であり、それにもとづく自由の精神にあるはずだとは、誰でも期待するところですが、そのような信仰と人間的自由のためのたたかいの燃え立つほのおは、いっぺんも身近かに感じ取られなかったといつてよいでしょう。教職員組合の委員として活動したり、平和運動に首をつこんで学園内や京都の各集団といっしょに動いたり、また大学をはじめ同志社各学校の教職員の方々と話しあつて「キリスト教社会問題研究会」を結成しその一員として仕事をしたり、そういう私の直接経験した方面のことでも、それがキリスト教信仰生活と無関係だったとは言いきれませんが、信仰的生活原理がそれを動かす根源の情熱として積極的に仕事を燃え立たせるものだったかどうかという反省を、私はいまにいたつておさえることができません。そのことは大学の教員としての本務である教育と研究の面でも同様です。

同志社を燃え立たせるもの、それはいったいどういうものかという形であるべきであり、またありうるのでしょうか、いま同志社から離脱して、あらためてかんがえてみてほしいです。

(前大学文学部教授)

後をふり返り、

前をのぞみながら

ドロシー・デッソー

定年に達した私の気持は複雑である。これからは少しはひまができるだろうと期待する心があると同時に、この二十年間つづけてきた学生の指導をやめるのは残念だと思う。私の方は学生たちから教えられるところが多かったが、その人達が私から学んだものがあつたら私はうれしい。

四十年以上もソーシャルワーカーとして生きた私の主な仕事は困難をもった個人への援助であつた。授業の場では個人に関心をもち、その人の欲求を敏感に知り、その援助に必要な科学的知識と技術を身につけねばならないと私は主張してきた。はじめは私の教えることを低い次元のものだとして反発する学生も多かった。実践に重きをおく私の教え方について、それが充分に学問的でないという不満(学校には理論の勉強をしにきたのだ)も出た。そんな人達は講義の順序がきちんととつていて、序や章や項に区分けてノートのとれるような講座をもつとも好んだ。

私の教えるのはとつたノートにならないのだそう。学生がもつとも得意なのは共産主義対資本主義論とか各国の社会福祉制度論とか、社会学理論概論とかについての討論であり、授業が人間のことその日常生活、心の問題、治療などということになってくると、彼等の顔に当惑の表情が浮かんだ。

ケースワーク前期実習となつて、実際に悩み苦しむ人を相手に何とか口をきかねばならない場面となると、彼等は手も足もでない。このような時間の使い方は非学問的であり、浪費であると彼等は思う。ところが次第に実習に巻き込まれて行き、さまざまに家族問題、心理問題、対社会問題をかかえた人々に面接し、スーパーバイザーの緊密な指導を受けているうちに、仕事の効果も見えてきて、彼等は教えられることの価値を認識するようになる。そして二年目の終りには人間援助を専門職として立つという準備をもった人間になるのである。私のした一番大切な貢献はこれだつたと思つている——ソーシャルワークでの実践の大切さ、理論と併行する実行の大切さを学生にたたきこんだことである。

大学の卒業式を英語で commencement という。人生への出発という意味である。教育を終えてこれから社会人として貢献する門出である。私も自分が退職するとは考えない。新しい出発を commence する、社会への貢献をつづけるのだと考えたい。これらの年月をどのようにすごすにしても、私に色々のことを教えてくれ、その考え方や感じ方の深奥を開けて見せてくれた同志社の学生諸氏に私は感謝している。

(前大学文学部教授)

※デッソー先生の本稿は大学広報 No.37 から、著者の了解を得て掲載しました。